

将来は、「地震」に携わる仕事につきたい。



Y君は、神戸にきた時、3ページでお知らせした加藤いつかさんの被災体験談を聞いた修学旅行生の一人でした。
 (「被災地だより 絆12号13号」に既報)



神戸にきた修学旅行生から

広島からの修学旅行生Yより

地震のことをちゃんと学んでいきたと思ったのは、中2の時、初めて神戸を訪れた時でした。もし神戸を訪れていなかったら今は、全く、別の進路を考えていたと思います。

あの時は、ポートアイランドの仮設住宅や震災資料館、復興住宅を見学したんですが、一つひとつを見ていくうちに、何か不思議な気持ちになっていったんです。特に感じたのが、「自分には本当に何もできないのか?神戸のために、そしてもう二度と神戸の悲劇を起こさないために」ということでした。

でも、当時の自分には、何をどうすればいいかわからなかったもので、具体的な行動に移すことができませんでした。

高校生になって、初めて進路を意識するようになった時、その時には周りに理系の人が多く、皆、工学系志望だったので、自分も工学系に進んで、地震に強い建築物を設計しようとかとなく決めてしまいました。

でも本当にそれが自分の進みたい道なのかというのを考えてみると違って、よくよく考えてみたら、自分は地震の事を真剣に学んでいきたいのだということを改めて感じました。

地震についてといっても、自分にできることというのはいろいろあると思うし、今の段階では、大学の理化学系に進み、地震そのものについて学びたいと思っています。もし、それがだめでも、ボランティアや福祉活動など、何かの形で、地震に携わった仕事ができたらと考えています。

被災地だより

これ以上人災による犠牲者を出さないために
 強力な絆を避難所になった神戸の学校現場から全国へ

絆 震災8周年



第22号 2003・1・17

全教神戸市教職員組合「絆編集係」神戸市中央区下山手通4・13・9中尾ビル3F・
 TEL-078-391-7508・FAX-078-391-8549・〒振込口座番号 01170-7-29732

こうべは、安全、安心が生かされた
 「学校」になっているでしょうか?



兵庫県南部地震は、1995年午前5時46分未明に起こりました。その結果死者6433名、その原因の8割以上が建物の倒壊、落下物による圧死、その後の火災による焼死でした。いかに建造物が危険な状態であったか、安全な建造物にすることが多くの犠牲の上に立って得た貴重な教訓として指摘されてきました。もし、3時間後に地震が起こっていたら、学校での被災を想像するだけでぞっとする思いでした。ところが、あれから8年、学校は、依然として危険がいっぱいであるという結果が下記のように報道されました。

子ども達への安全と安心、「命を大切に教育」が叫ばれていますが、何より、そこで学ぶ校舎の安全を保障することが、その前提です。「耐震構造の建物で学習すること」は、被災地神戸での教訓を生かす原点の1つ、全国へ発信する貴重な教訓ではないでしょうか?財政難を理由に、子ども達の居場所を危険な状態で済まそうとする「神戸市の姿勢、行政のあり方」が問われます。

財政危機 市民生活に忍び寄る影

昨年秋、神戸市内公立学校の耐震診断の実施率が判明した。被災地でありながら、わずか6%。全国平均の31%を大幅に下回る。診断には一棟平均2~300万円かかる。だが2001年度の予算は約550万円、02年度は500万円を下回った。震災後、診断が済んだのは市内で10校にすぎない。「やりたいという思いはあるが、財政難だ。もどかしい」と、同市教委学校整備課の染田啓市管理係長は言った。
 (神戸新聞2003年1月16日)

「財政難」を理由に、学校の耐震診断実施率6%。こうべの学校は危険がいっぱいということがわかりました。

新刊紹介 「大震災100の教訓」

編集：塩崎賢明 (神戸大学工学部教授) 西川榮一 (神戸商船大学教授)
 出口俊一 (兵庫県震災復興研究センター事務局長) 兵庫県震災復興研究センター (被災地復興を目標に1995年4月設立、その後被災地の情報発信を全国に続けている。)

内容：大震災・・・明日は、わが身・わが地域に起きてもし不思議ではない。いざというときに役立つ《阪神淡路大震災の教訓》決定版。防災から危機管理、復興のあり方から市民生活まで、総合的に明らかにする。
 52人の専門家・市民が、20のテーマ、115項目でわかりやすく解明!
 すいせん：長野県知事・田中康夫・鳥取県知事・片山善博



発行：かもがわ出版
 定価：2200円+税
 申し込み先
 震災研究センター
 (FAX:078-371-5985)
 (TEL:078-371-4593)

おすすめの言葉：

《最後の一人まで救済を》という「弱者の立場」から、復興のあり方を検証し続けている「兵庫県震災復興研究センター」が震災8周年を迎えるにあたり、今までの復興のあり方について検証した貴重な一冊である。様々な震災関連した本が出回っている中で、この書籍の特徴は、「復興の問題点」として市民の目で「行政責任」「企業責任」を厳しく問い続けている点である。
 今後、被災地での震災復興の羅針盤として、また、近いうちに起こるであろう大地震に備えての防災マニュアルとして是非、本書の活用をお勧めしたい。

特集

神戸の若者は今 p2~3 (温かい輪の中で育つ2人を紹介)

三宅島の子ども達は今
 (p4~5 帰島のその日まで)

埼玉県飯能高校での防災施設
 (p6~7 公開事業の様子)

被災地神戸からの発信を受け止めて

もくじ

- 1・神戸の学校は「安全」?・・・p1
- 2・「震災遺児」のH君が、ニューヨークで・・・p2
- 3・「はるかのひまわり」(「妹の死」を受け止めて、新たな一歩)・・・p3
- 4・「三宅島」の今、厳しい現実でも希望を忘れない。p4~5
- 5・防災事業「埼玉・飯能高校」の取り組み(神戸からの発信を受け止めて) p6~7
- 6・手づくり市民追悼式の意義・・・p7
- 7・広島から神戸にきた修学旅行生からの手紙・・・p8
- 8・「震災復興」お薦め本の紹介・・・p8

「H君のその後」

1995年1月17日、H君のお母さんは、大震災の朝、H君の上におおいかぶさってH君を助けながら、そのまま還らぬ人となってしまいました。

その年の4月、H君はM中学校に入學しました。私は当時担任として前々から家庭状況を聞いてはいましたが、時々見せる彼の異常な様子に唖然としました。一見とても明るい表情で授業中途切れることなくおしゃべりをします。しかもとても大声で……。しかしふと静かになったなあと思って見ると、目は宙を見つめ、ボーッとした表情で「マーマ」「マーマ」と無意識に言っているのです。「母親の死がここまで……」と、涙がこみ上げてくるほどでした。

彼はほとんどの授業に身が入らず授業中のひっきりなしのおしゃべりで成績もほとんどが最低の「1」ばかり、放課後に勉強を教えても「心ここにあらず」の様子で効果が見られませんでした。

3年生になって進路を考える段になって昼間の高校をめざしましたが、結果的に定時制高校に進学しました。

その後、どうしているのかなと気になりながらも、直接近況を聞くことはしていなかったのですが、6年後の新聞記事でH君のその後の消息を知ることになったのです。

それは、2001年4月にある新聞の1面にレインボーハウスというNGOが震災孤児の代表2人をアメリカに送り、アメリカのニューヨークテロ後孤児になった子ども達と交流を進めるという記事が出ていました。その代表の一人がH君と出ているではありませんか。

H君は、震災後あしなが奨学金のお世話になっていて、その後もレインボーハウスを通して孤児グループとの交流やあしなが奨学金の募金活動などに積極的にかかわっていたのです。

神戸では

中学校教諭 長田 寿和子

久しぶりに電話をかけてみると、しゃべり方もすっかり落ち着いて大人になっていました。今は大学の経済学部1年生であんなに苦手だった英語やさらにフランス語も勉強していること、失礼とは思いましたが、いつからそこまで学習意欲が高まったのか聞きました。

「進学した定時制はすぐやめてしまったもののレインボーハウスの活動を続けていく中で、これではだめだと思って17才の時に大検を受けて今の大学に合格しました。」という返事が返ってきました。

私は彼の返事を聞いて、ともすれば彼に対してあきらめかけていた私自身を恥ずかしく思い「どんな子もやればできる」ということを確信しました。

その後、彼はこの夏レインボーハウス主催の「テロとアフガン爆撃の被害者家族を日本に呼び、共にキャンプ生活を楽しむというイベント」の中心的なリーダーとなってがんばりました。後日そのことがテレビで放映され、彼の顔がアップで紹介されました。

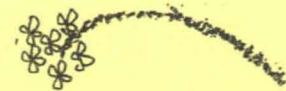
「どの子も偉大な可能性を秘めている」そして「どのような災害にも負けないう人間の力の大きさ」を実感しました。

それは、彼のその後の努力と、その努力を引き出したNGOの温かい連帯した活動から、私自身が教えられたことでした。

「あしなが奨学金・レインボーハウス」について

災害遺児と病児遺児の奨学団体「あしなが育英会」は1993年4月にスタート。阪神大震災への心のケアが本格化した1996年4月に会則を見直し、死因によって遺児を区別せず、全遺児を支援するとともに、遺族もケアの対象とした。阪神大震災の震災遺児573人の救済のために、95年4月、神戸事務所を設立。奨学金制度の周知と心のケアに本腰を入れ、癒しのデイケアセンター「レインボーハウス（虹の家）」が東灘区に99年1月9日に完成。震災遺児の心のケアに本格的に取り組んでいる。（ホームページより抜粋）

「はるかひまわり」



「震災を語ることは「前を向いて生きること」

加藤いつか

1995年1月17日午前5時46分に阪神淡路大震災が私の街、神戸を襲いました。それから8年、震災で大切な人を亡くした人たちにとっては長いような短いような月日、震災当時我が家は、4人家族、私は15歳で中学3年生、妹は11歳で小学6年生、両親と暮らしていました。

あの朝、私は2階で、妹は1階で寝ていました。妹だけが家具の下敷きになり亡くなりました。震災での妹の死により私たち家族の生活は大きく変わってしまいました。

母は亡くなった妹を思い毎日のように泣き暮らしており、父は対照的にただ無言で仕事に逃げていくように見えました。私は、自分がしっかりして両親を支えなくてはと変な責任感にかられて、両親の前では、泣くこともできず感情を押し殺していました。でも、時間の経過と共にいつまでも泣いて私の方を見てくれない母親に対して、もっと生きている私の方を見てほしいと言う気持ちを持つようになりました。先に亡くなった妹に嫉妬さえ覚えました。

そんな気持ちだった私に少しずつ変化が出てきたのは、亡くなった妹はるかを通して出会ってきた人たちがいたからです。きっかけは、一輪のひまわりでした。震災の年の夏、妹が亡くなった場所に、一輪の大きなひまわりの花が咲きました。その花は、生前妹がかわいがっていた隣の家のおうむのえさだったひまわりの種から咲いたものでした。その後その場

所にはたくさんのひまわりが咲きました。地域の人達は、その花の種を集めて、「はるかひまわり」と名付けて毎年絶えることなく植え続けてくれています。

はるかひまわりは、私にたくさんの出会いをつくってくれました。同じ震災を経験した人達の中で、私は肩の力が抜け、当たり前ができるようになりました。みんな抱えきれないくらいの悲しみをかかえながら、少しでも明るく生きようとしている自分一人だけが辛くて悲しいんじゃない、そう思えるようになりました。

今私は、1・17希望の灯りというボランティアグループで震災を通して命の大切さを伝えていく活動をしています。私は語り部として、目に見える神戸の街は、元気を取り戻したように見えるけれど、まだまだ心に深い悲しみを抱えている人たちがいるということを忘れないでと伝えています。震災を語ることは私にとって、妹の死をしっかりと受け止めて、私自身が前を向いて生きていくために大切なことなのです。

失った人は戻っては来ないけれど、「ちゃんと一生懸命生きたよ」そう伝えることができるのは、残された私たちにしかないのだから。

最後に、今日成人式を迎えるはずだった妹はるかに、たくさんの出会いをありがとうと言いたいです。

ありがとうございました。

この原稿は、NHK青春のメッセージ'03に近畿7ブロック代表として出場、審査員特別賞を受賞したものです。

加藤さんの思いは、この「被災地より絆4号」で、妹を亡くして3年後の気持ちを、「13号」で、神戸に来た広島修学旅行生に震災体験者の一人として語ったことなどとして掲載されました。少しずつ「妹さんの死」を受け止め、前を向いて生きていこうとする姿勢に周りが励まされたものです。そして今回、全国の人々に訴えるという大きな舞台に立ち、審査員特別賞を受賞されました。これからも、たくさんの出会いの輪を広げ、活躍されることを願っています。

帰島に向けて希望の光 その日まで力を合わせて

小笠原康夫 (三宅島・坪田小学校 秋川公舎)

三宅島から避難して二年と四ヶ月が過ぎてしまいました。避難当初の2000年9月には135人が在籍していた小学生は、次の年の2001年4月には22名、そして、2002年4月には在籍数0という子供の在籍しない小学校となりました。

中学校は、避難当初(平成12年9月)は120名いた中学生も、13年度には57名となり、そして今年度は22名とかなり少なくなってしまった人数でスタートしました。

今、帰島へのかすかな光がさしてくる中で、苦しい生活の中でも力を合わせてみんなで力を合わせてがんばってこうと決意を新たにしています。

小学校の子どもたちは

2002年3月の2名だけの修了式を最後に、今は全員が親元の学区の小学校へ通っています。転入先の学校ではそれぞれ暖かく迎え入れられ、地域や学校にもとけ込んできています。私たちも時々当該校を訪問して行事を参観したり、担任の先生の話の聞いたり、本人と会って励ましたりしています。

避難当時に保育園の年長組だった児童は今お世話になっている学校で入学式をしています。今、1年生と2年生になっていますが、そんなことから、特に転校先の学校に慣れるのが早かったように思います。

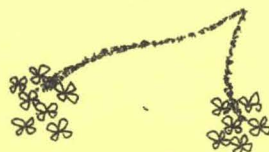
中には若干ですが、高学年や中学生を中心になかなか馴染めず不登校気味になっている子供も出てきています。担任の先生と相談したり、保護者の方とも話し合ったりしていますが、なかなか難しいところがあります。避難生活が2年以上に及び、長引くにつれてどう影響が大きくなるのが心配です。

小学校の教職員は

当初40数名いた教職員は、在籍ゼロに伴い、現在は20名たらずとなりました。

今、週に2日から4日間は都内の各小学校へ「兼務」という形で専科やTTとして勤務しています。あとの1日～3日間は村立小学校の教員として勤務し、全国各地に散らばっている子供たちの家庭訪問や学校訪問を行っています。休日や夏休みには、転校している子どもたちを集めて、運動会や文化祭、遠足、移動教室、三宅島への児童一時帰島などの行事を実施しています。つい先月の年末には群馬県の新治村へ「海と山の交流事業」としてスキー交流会に行ってきた。転校している子供たちや保護者あわせて80名ほどが参加しました。

また、日常的に連絡を取り合うためにカラー版で写真の多い「学校便り」を定期発行したり、休

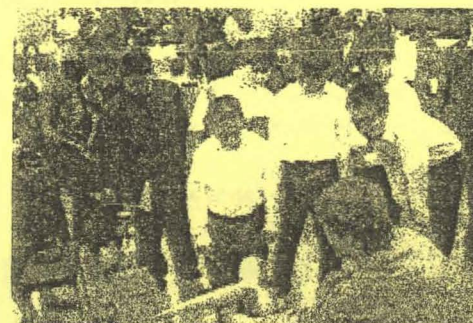


海上より望む島全景(噴火前)

日を利用しての地域別の懇談会を実施したりしています。秋川校舎にいるときは、帰島できたときにはすぐにでも島で小学校が再開できるように年間指導計画の作成や「評価基準」づくり、社会科副読本の作成、教材の整理などを行っています。

教師である以上授業を通じて子供たちとふれあえるうれしさはありますが、2校の「兼務」という言わばどっちつかずの二重生活に疲れ気味の教員が多くなってきました。

中学校では



もちつき大会

三宅村立中学校も秋川の校舎で3度目の冬を迎え、平成14年度も残すところ3学期のみとなりました。避難当初(平成12年9月)は120名いた中学生も、13年度には57名となり、そして今年度は22名とかなり少なくなってしまった人数でスタートしました。

新学期が始まるまではこの人数でどうなるのだろうかと思いましたが、初々しい4名の1年生を迎え、少ないながらも、素直でけなげな生徒たちのがんばりに支えられながら、学校生活を送ることができました。

小、中、高校合同で行った運動会や文化祭。特に文化祭では中学生全員で取り組んだ創作劇が好評でした。夏休みには避難後初めて子供たちの一時帰島が行われ、それぞれが自宅や学校、島の様子を自分の目で見て、何かを感じ取ってきたようです。

全島避難よりすでに約2年半の歳月が過ぎようとしています。火山性ガスの噴出は続き、島民は都内をはじめとした全国各地でいまだに苦しい避難生活を送っています。

この災害避難は私たちに家族とは何か、故郷とは何かということを改めて深く考えさせるものとなりました。三宅の子供たちの大半は今、親元か地元の学校に通っています。多くの子供たちはそれぞれの学校で元気に過ごしていますが、長期の避難生活で何らかのストレスを抱えている子供たちも少なくありません。

このような状況の中で、大切なことはやはり先生方の協力と連携を深めること、様々な問題に対して率直に意見を出し合い、知恵を出し合う場を多く持つということです。そして、本当に子供たちのためによりよい方向を探って行かなくてはならないと思っています。

最近、少しずつ帰島に向けて明るい見通しになってきました。まだいつ帰れるかはわかりませんが、その日まで、力を合わせてこの状況を乗り越えていきたいと思っています。

子どもたちの今と未来が輝くように！



学校防災施設の公開事業を終えて

倉川 博（埼玉県立飯能高等学校）

◆はじめに

2002年10月25日に、飯能高校の創立80周年記念事業の一環として「備えあれば憂いなし いざというときのために、飯能高校の避難施設を公開します」と題する会を企画しました。そのいきさつについては「絆 No21」で紹介させていただきました。

学校の周年事業という、たくさんの人を集めて華々しくおこなうことが多いのですが、私たちはあえて地味であるが重要なテーマを選びました。しかし、平日の午後の開催ということで地域みなさんに来ていただけるのか、開会の直前まで心配をしました。当日は、万が一の際は飯能高校に避難することになる地元のみなさん、市の防災関係者など約70名が参加しました。

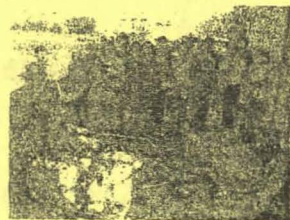
今回は当日のようすなどを報告します。

◆事業の内容

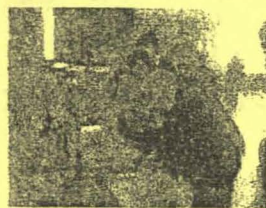
1. 施設見学

飯能高校は県内に38校ある防災拠点校のひとつです。阪神・淡路大震災の教訓を生かして避難施設がつけられました。当日は小班に分かれ、教職員も一緒に施設の見学をしました。

日頃は格技場として使われている避難施設には、水道の断水に備えて雨水を使った水洗トイレやシャワー用の太陽熱温水器、避難時に10畳程度の小部屋をつくる可動式の間仕切り、食料備蓄庫などがあります。校庭の地下には耐震水槽があり、2000人の避難者の約1週間分の



地下貯水槽からの揚水実演



インターネットによる安否確認体験

水が確保されています。また、非常時には避難施設の電源は太陽光発電とディーゼル発電により供給されます。当日は、こうした施設を見学しましたが、参加者一同、とくに教職員からは（身近にこんな施設があったのかと）驚きの声があがりました。

また、今回の創立80周年事業予算で避難施設内にインターネット回線を入れ、段ボール式簡易トイレなども購入しました。

2. 講演「神戸からの発信」

被災者ネットワーク代表の安田秋成さん、稗田小学校の池見宏子さんにおいでいただき、自らの体験や災害後の活動を紹介していた

いただきました。おふたりの活動のようすは、この「絆」紙上でもたびたび紹介されていますのでここでは割愛しますが、参加者は、いわば他人事であった500km離れた場所の約8年前のできごとを、何年後か先の自分と結びつけることができました。わずか90分の中で、おふたりにはまだまだ伝えたいことがあったと思いますし、参加者からももう少しじっくり話を伺いたかったとの感想が聞かれました。



安田秋成さんの熱のこもった講演



避難施設についての説明を聞く安田秋成さんと池見宏子さん

3. 避難所運営マニュアルの紹介

この事業がはじめて企画されたときは、「学校防災マニュアル」を作成することがひとつの目標になっていました。その後、「学校防災一神戸からの提言」（神戸新聞社刊）や池見さんをはじめ神戸のみなさんの意見を参考に、分厚いマニュアルではなく、災害発生時の飯能高

校の対応を手短かにまとめたものを作成することになりました。当日は、
・飯能高校の役割
・避難にあたってのお願い
・施設の概要
・避難所の部屋割
・避難所運営 について
まとめた4ページの文書を参加者に配布しました。

◆おわりに

飯能高校の防災拠点施設は、地域や学校が要望して作られたものではありません。管理に手間がかかることもあり、「ありがた迷惑」というのが学校としての本音だったと思います。しかし、80周年事業をひとつのきっかけとして、地域みなさんが使えるものにしていこうという発想の転換ができました。

当日の講演の中では、池見宏子さんは「防災で重要なことは、マニュアルよりも日ごろの人間関係」ということを強調されました。講演後、早速地元自治会の方と市の防災担当者が避難所の鍵の保管方法について話し合いを持ったと伺いました。市民と学校、市民と行政の距離がいくらかでも近づきかけになれば、今回

の事業はとりあえずの目的を達成したといえると思います。また、教職員のなかで防災に関する意識を高めることができたのも大きな成果だと考えています。

大きな災害を経験したことのない地域では、市民の中からの防災意識の高揚を期待するのは現実として難しい状況です。むしろ、学校が防災拠点校として積極的に啓蒙活動をする中で市民の意識も高まり、いざというときには避難所が市民の立場にたった存在になっていくのではないかと考えています。

今後は、「避難所運営マニュアル」を市民の意見を参考に修正しホームページなどを通じて地域に公開していく予定です。

8年目にして、未だ真の復興が終わらない神戸。第2の神戸を出さないようにと奮闘し、発信を続ける皆さんに敬意を表するとともに、私たちもその活動をしっかり受け止めていきたいと思っています。

1・17手づくり市民追悼式(3回目)

すべての犠牲者（6433人の犠牲者、253人余りの孤独死、仮設・復興住宅などの犠牲者）の冥福を祈り、人命優先の復興を誓うために

大震災から8年になります。行政が「追悼式」を中止して3年、その時から始めた「手づくり市民追悼式」は3回目となります。「心のこもった法要、胸が熱くなりました。」「聲明と二胡の音色が心にしみました。」と手を合わす人々、私たち被災者は、震災犠牲者を心に抱き続けています。街は震災と不況で明日が見えず、市民生活の苦しみは大きく深くなっています。地域は震災前より住みにくくなりました。なじみの客がいなくなり、市場や商店がつぶれています。人が元の街に帰れず、地域の活性化は困難です。被災者は「公営団地」に集められ、生活用品はスーパーやコンビニに求めざるを得ない、わびしい暮らしです。安心して住める街、安全な住宅、高齢者、障害者、子ども達にやさしい街、復興は「人間優先」であるべきです。

防災対策は多数の犠牲者を出したことを反省し、人命尊重を第一とすべきです。

1月17日は、6433人の犠牲者、253人余りの孤独死、仮設・復興住宅などのすべての犠牲者の冥福を祈りましょう。生き残ったものが、人間優先復興を迫ることを誓いましょう。（市民追悼式「呼びかけ文」より）

2003年市民追悼式実行委員会
（事務局：阪神淡路大震災被災者ネットワーク）

参加者の声から

私は、この8年目の集会に参加して、震災後の神戸は、職を失った市民と、将来への展望を失っている子ども達の姿がダブって見えました。このままでは、神戸は将来への展望をなくしていくと思うと大変な危機を感じました。生活再建の見通しがもてる神戸にしたいと強く思いました。（竹中 登）